

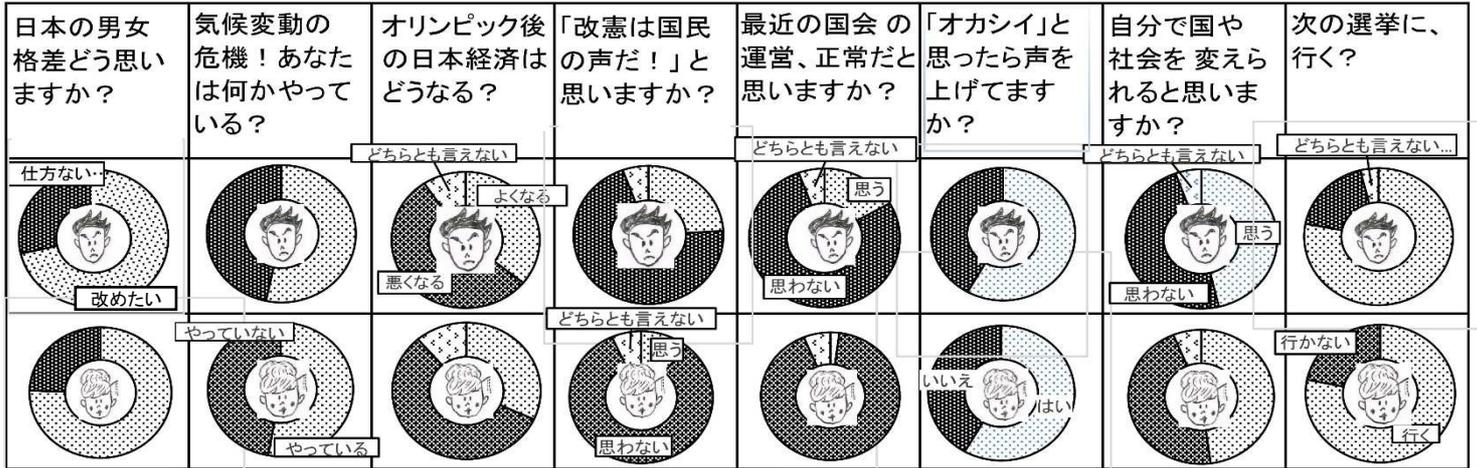


代沢九条けいじばん

第47号
2020年1月27日発行
代沢九条の会
(代沢2-37-5-101)

いま、若者の思いとは？

新しい年が始まって1カ月。今年は何ですか？—あんまり～、と聞こえてきそうな世の中の雰囲気。今年のテーマは『思いをおしこめず』『自由に語り合い』『人と人、世代間のギャップを越えてわかり合う』『アンテナを張り』、世の不条理には、『サイレントマジョリティー(物言わぬ多数派)』はもうやめよう！
成人の日、シール投票で、若者をメインに男性45人、女性54人に聞きました(若者率約80%)。(上段:男性、下段:女性)



多数の参加、ありがとうございました。

報じられる世論調査結果などよりは、皆さんの意識はずっと高かったのので、この国はまだ大丈夫か…。

〈参考資料〉①WEF(世界経済フォーラム)の男女の格差を表す指数(男性の値を1としたときの女性の値)は4分野、14項目にわたる。2019年の指数は教育、健康の分野では0.95以上なのに、経済で約0.6、政治では0.049!女性の国会議員の数、女性閣僚の数が日本は極端に少ない。総合評価で、世界153か国中、121位。②日本財団による〈18歳の意識調査(2019)～世界9か国、1000人の17～19歳への一斉アンケート～〉での『自分で国や社会を変えられると思うか』の質問に、日本は『はい』が男性24.8%、女性11.8%で9か国中、最下位。インド83.4%、アメリカ65.7%、ベトナム47.6%、韓国39.6%(男女合計)。

桜の名簿出しちやいまちょうか



沖縄、南西諸島の軍事施設の現状を知ろう！ 『ドローンの眼』上映会

2020年2月16日(日) 午後2時～4時
(開場1時30分) 入場無料

代沢東地区会館2階大会議室 (代沢1-31-8)
主催 代沢九条の会

まずは知ることから～ドローンによる上空からの現場撮影で進行中の軍事施設増強の状況がよくわかります。本土の、世界の人たちに沖縄を知って欲しい、と20年以上、沖縄での撮影を続けている2監督(藤本幸久、影山あさ子)の最新のフィルムを紹介します。

代沢九条の会事務局 03(3412)6097 (ファックスとも)

URL:<http://www.7b.biglobe.ne.jp/~daizawa9j/> email: daizawa 9j@gmail.com

【沖縄通信 - 「10年後の日本、そして辺野古」】

2019年12月下旬、毎日新聞が、『辺野古工事に10年以上、もはや非現実的な計画だ』と題した社説を掲載しました。これは、日本政府・防衛省が、大浦湾辺野古海域の埋立工事にあたり、予定工区での軟弱地盤改良工事などに、10年以上を要する見通しを立てたことから、もはや非現実的だとして、「沖縄の基地負担を軽減する原点に立ち返り、県や米側との協議を仕切り直すべき時である」と論じたものです。

沖縄県以外の都道府県に住む方々には、「へー、そうなんだ」と意外な感じで軽く受け止めた方が多かったのでは？しかしそれは、沖縄に住むもの、辺野古に関心を寄せる方々の間では、既に数年前から、そして常に、「言い続けてきたこと」に過ぎません。

10年後の日本。皆さんは想像できますか？日本は、東アジアの中で、周辺国から認められる平和で豊かな国になっているのでしょうか？辺野古に新基地は出来ているのでしょうか？10年後のその姿を見るために、これからも辺野古に通い続けます(沖縄通信員:岩村利一・幸子)

「海軍省」の怪

1月5日の朝、テレビ東京で放映された「超スゴ自衛隊の裏側全部見せますよSP」をみました。番組中の、海上自衛隊の護衛艦での訓練ルポの場面で、「艦内では『〇の一滴は、血の一滴』と言っていますが。〇は何でしょう」というクイズが出ました。正解は「水」。長期間、海上活動を行う護衛艦にとって海水を真水に変換する装置があるとはいえ、水は貴重な存在でしょう。

ところが、正解が発表された後にそのことを記した掲示物が映し出されると、文末に「海軍省」と記されていました。旧海軍時代から継承されている伝統ある教訓なのではないでしょうか？しかし、昨今の改憲の動きや、航空自衛隊の航空宇宙自衛隊への改称、自衛隊の中東派遣決定などと重ね合わせると、「海軍省」の怪どころではないと感じました。お屠蘇気分が吹っ飛び、背筋に冷感が走った正月休み最後の朝の出来事でした。(深田 伊佐夫)

追悼 中村哲さん

長年、人道支援に取り組んでこられた中村哲さんが、アフガニスタン東部で銃撃され、亡くなりました。医師の中村さんが100の診療所より1つの用水路が必要と言いつラクターを動かしていた姿が忘れられません。

アフガニスタンでは、大統領が棺を担いで送り出してくれました。日本では、安倍さんが出迎えてもよかったのではないのでしょうか？

「人道支援」の本当の意味を問いかけてくれた存在でした。同じことはできないけど、その遺志を少しでも継ぐことができれば…と思います。ご冥福をお祈りします。(宮田)

「憲法第九条」を読み直す

昨年末、昔読んだ小林直樹著「憲法第九条」岩波新書196を読み直した。1982年の刊行だからまだ冷戦が続いている時の刊行だが、憲法第九条の成立過程、その解釈をめぐる議論、自衛隊との関連、政府解釈の変遷、国防はどうあるべきか等々、記述が緻密で時代の差を感じさせない。

著者は核兵器の開発以降戦争が質的に変化し、最も現実的な国の安全保証は「非武装の平和主義」であるとし、そのために憲法第九条の理念を徹底し、安保条約の撤廃、自衛隊の解体または変更、そして「真理と正義」を愛する市民の育成が必要であると主張する。

このような緻密で論理的な「日本の安全保障をどうするか」という議論が、今は必要なのではないかと思う。(酒井)

中村哲さんの言葉～ マガジン9(2008/4/30)より

「日本は、軍事力を用いない分野での貢献や援助を果たすべきなんです。現地で活動していると、力の虚しさというのがほんとうに身に沁みます。銃で押さえ込めば、銃で反撃されます。当たり前のことです。でも、ようやく流れ始めた用水路を、誰が破壊しますか。緑色に復活した農地に、誰が爆弾を撃ち込みたいと思いますか。それを造ったのが日本人だと分かれば、少し失われた親日感情はすぐに戻ってきます。それが、ほんとうの外交じゃないかと、僕は確信しているんですが。」



「僕は憲法9条なんて、特に意識したことはなかった。でもね、向こうに行って、9条がバックボーンとして僕らの活動を支えていてくれる、これが我々を守ってくれたんだな、という実感がありますよ。体で感じた想いですよ。」

《中村哲さんについて》

脳神経内科医師。福岡市出身。1946年生。1984年、日本キリスト教海外医療協会(JOCS)からパキスタン辺境のペシャワールに赴任。以来、20年以上にわたってハンセン病を中心とする医療活動に従事し、ペシャワール会現地代表を務めた。登山と昆虫採集が趣味。2010年、水があれば多くの病気と帰還難民問題を解決できるとして、福岡県の山田堰をモデルにして建設していたクナール川からガンベリー砂漠まで総延長25kmを超える用水路が完成させた。約10万人の農民が暮らしていける基盤を作った。2016年、現地人が自分で用水路を作れるように、学校を準備中。住民の要望によりモスク(イスラム教の礼拝堂)やマドラサ(イスラム教の教育施設)を建設。2018年、アフガニスタンの国家勲章を受章した。そのほか国内外の受章多数。2019年12月4日、アフガニスタンの東部ジャラーラーバードにおいて、車で移動中に銃撃を受け、搬送される途中で亡くなった。(中村哲 Wikipedia参照)座右の銘は『照一隅』(一隅を照らす)。